●春日部市民文化講座（第 14 回）

「千利休のもてなしの心　～戦国武将はなぜ茶の湯に熱心だったのか　第4回　織田有楽斎、茶室「如庵」のもてなし」

◆日時：2015 年 1 月 28 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■織田有楽斎をお話する前に

まず、わび茶を完成したと言われる人で**武野紹鴎**という人がいます。この紹鴎は**千利休**を指導した人です。同じ武野紹鴎の弟子で**日比屋了慶**という人がいて、この人は、**日本の教会史では有名人**ですが、茶の湯の世界ではなかなか知られていない人物です。現在、この人の屋敷跡は、大阪府堺市ザビエル公園になっています。なぜかと言うと、**フランシスコ・ザビエル**は、この日比屋了慶の家に泊まり、続いてきた宣教師たちも彼の屋敷でお世話になっています。ですから、日本で最初の家の教会が日比屋了慶屋敷だったと言ってよいと思います。この日比屋了慶ととても親しい親戚関係にあったのが**小西行長**です。家もすぐ近くにありました。堺の小西邸の道路を挟んだ反対側に日比屋了慶の屋敷がありました。当時、**織田信長**は日本の支配者として頭角を現そうとしている時期だったのですが、この頃に、フランシスコ・ザビエルはポルトガル船に乗ってやって来られました。1549 年ですね。

■初めて押し寄せるグローバル化の波

グローバル化って言葉は聞いていますけれども、なかなか意味不明ですよね。実はフランシスコ・ザビエル達が持って来た物の中に地球儀があったのです。世界地図があったのです。それから楽器、オルガンとかガンバ、足に挟んで叩くやつね。**織田信長**はそういった物に魅了されるのです。そして世界の大きさを知るわけです。ですから、この大きな世界にどういうふうにコンタクトを持ったら良いかというのが、信長のビジョンでしたね。だから宣教師達を受け入れ、キリスト教も受け入れたのです。**織田信長の次男の信雄（のぶかつ／のぶお）は洗礼を受けています。**　次が豊臣秀吉、そして徳川家康になりますが、南蛮船で来たポルトガル人を通して、地球の広さを知るわけです。日本の僧侶達と宣教師が問答をする機会があるのですが、信長から見ると広い世界を知り、地球の裏側から来た宣教師達ははじめから勝負ありだったのです。勉強の仕方が全く違うのです。**自然学、地理学、哲学、神学、建築・土木学、治水の学問をすべて修めて彼ら宣教師達は日本に来ているのです**よ。ですから、信長が安土城を作ったときに、宣教師達は築城技術をアドバイスしているのです。それが最近になって良く分かってきたのですね。安土城は西洋の知識がなかったらできなかったということが分かってきています。そういう時代に利休さんの茶の湯というのは流行った訳です。

■利休七哲

利休さんのお弟子に**蒲生氏郷**がいます。この人が一番なのですが、何故ならば徳川家康と一緒に千家を救った人だからです。次が**高山右近**です。ぼくはこの方の研究をしていて茶の湯と触れ合ったのです。表千家の資料によると利休七哲の第二番目に書かれているのです。次が**細川忠興**、細川護熙さんの先祖ですね。ただ、細川家では忠興の妻、玉様、洗礼名・ガラシャが細川家を救ったと言っているのです。その後は順不同ですが、**芝山監物、瀬田掃部、牧村兵部、古田織部**の七人が利休七哲です。そうすると、ちょっと茶の湯を学んだ人は**織田有楽斎**も入るのではないの‥？　と思いますよね。江戸時代に入ると、織田有楽斎を利休七哲に挙げている書物もあるのですよ。でも、ぼくが調べたところではこの中には入りません。では何故、この後になって織田有楽斎が利休七哲の中に数えられたりしたかと言うと、**千利休から直接、真の臺子（しんのだいす、極秘の台子と呼ばれる点前の免状）の許しを受けている人なのです**。その頃の利休さんと豊臣秀吉との約束事の中に、秀吉を通して初めて茶の湯が許され、真の臺子の免許が与えられるということになっていたのですが、織田有楽斎だけは別格で千利休から直接に茶の湯の極意を受けていると言われているのです。

■千利休のわび茶を表現した人・長次郎

千利休の茶の湯を深く哲学的に、戦国の武将達の心を打つように、千利休のわび茶を見事に表現した人が、皆さんご存じの**長次郎**という人です。樂吉左衛門さんはこの長次郎の 15 代目になります。ではなぜ、千利休のわび茶を表現したかというと樂茶碗を焼いたのです。本物の樂茶碗は土器なのです。土器の焼成温度は 850 度くらいで、それを超えてしまうと土の中の分子がガラス化してしまうのです。赤や黒の釉薬が溶けるかどうかという温度で焼かれている茶碗が樂茶碗なのです。今も同じような工法で焼かれていますが、今は窯が精密になってきて高温で焼かれるので長次郎の土器のようなかせた感じはなくなりました。ここでぼくは強調したいのですが、**千利休のわび茶というのは、消えていくものです。その消えていくものの代表として、私たち人間がある訳**ですよ。その消えていくものに対する評価、それが利休さんのわび茶だったと思います。英語で言うと**コンパッション**、消えていくものに対する惜しみない心、そして共感し、共に苦しむのです。

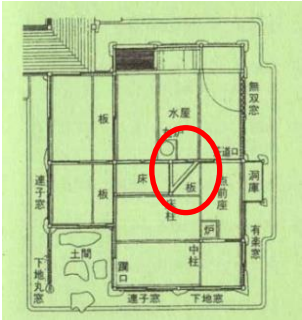
■十一男に生まれた有楽斎

今日は織田有楽斎のことを申し述べたいと思っていますが、織田有楽斎は織田信長の実弟であります。織田信長の父、**織田信秀**には 12 男 7 女がいて、**信長が二男、有楽斎・長益(ながます)は 11 番目の男**です。この織田家は兄弟同士で殺し合っていますが、この織田有楽斎は長生きするのです。75 歳。戦国武将で 70 過ぎまで生きることは凄いことで、兄の織田信長が本能寺で戦死した時に、仇討ちどころではなく逃げてしまったのです。

■織田有楽斎の洗礼名“ジョアン”

織田信長は宣教師たちをどの殿様たちよりも優遇しているのです。安土城を築城する時にも、建築技術のアドバイスを宣教師たちから聞き短期間で築城することができました。その城下町で楽市楽座を設けました。楽市楽座は市民が喜び、市民が楽しみ、平和であるようにと祈りを込めたまちづくりなのです。その中心にセミナリー、クリスチャンの指導者を育てる学校を作りました。それを強化したのは信長です。その信長と宣教師とのやりとりの間には、実弟の有楽斎・長益が必ずいたのです。信長が殺された時に、有楽斎は何処に逃げたかというと安土城に逃げたのです。しかも茶道具を抱えてです。だから嫌な奴と言われてしまうのです。お兄ちゃんの仇討ちもしないで、後から出てきた成り上がり者の秀吉に仕えて、しかも関ヶ原の戦いでは東軍に付いて家康に褒められるのです。**織田有楽斎は秀吉のブレインとなり、そして家康のブレインでもあったのです。彼の特技は、戦わずして戦いを止めさせることです**。彼は、信長の生き方を見ていてつくづくああいう生き方はしたくないなぁ‥と、洗礼を受けるときに思ったのだと思います。ですから、**織田有楽斎の洗礼名は「ジョアン」**というのでが、茶の湯の世界では今でも消えることなく続いています。ジョアンという名は、イエス様の 12 人の弟子の中で一番若い弟子の名前なのです。日本語で言うと“ヨハネ”、英語でいうと“ジョン”です。ヨハネという人は**“愛の弟子”**と言われていて、ギリシア語の“アガベー”は愛を意味します。織田有楽斎という人は、自分の洗礼名を大切にして最後に造った茶室を“ジョアン”“ヨハネ”という名にしていたとしたら‥。

■国宝の茶室『如庵』



『如庵』は、元和 4 年(1618 年)に京都建仁寺の塔頭・正伝院(しょうでんいん)が再興された時に、織田有楽斎が隠居して建てられた茶室ですが、明治 6 年(1873 年)に正伝院が永源庵跡地に移転し、その時に祇園衆の手によって祇園の一角に移築されて維持されました。その後、明治 41 年(1908 年)に三井さんのものになったのです。明治 6 年というと、キリシタン禁制の高札がやっと外圧によって取り去られた年です。ですから、ぼくがその時代に生きていても捕らえられることはなかったのです。でも、明治 6 年までは日本の中で殉教者が出ていたのです。それまで、キリスト教は邪教だったのですね。国宝になったのが昭和 11 年(1936 年)です。書院は重要文化財に指定されました。

■有楽とは誰か

今日は**「織田有楽、茶室『如庵』のもてなし」**で**「織田有楽斎とは誰か」**とテーマなのですが、この国宝**『如庵』**に不思議な空間があるのです。しかも、この三角形の鱗板というのも不思議なのです。ぼくは、ここに上げていただいてお茶をいただきました。何回行ったか分からないぐらいです。ここに三角の空間があるのです。今日は、この話をしたかったのです。表千家お家元の側近中の側近の一つが久田宗匠で、お家元になにかあった時には、久田家から人が出ることになっていのですが、先々代の久田宗匠の時代に建仁寺の正伝院から『如庵』が祇園衆に売り渡されて、茶室が解体された時に謎の三角の空間から不思議なものが出てきたそうです。それが何かは分かっていませんが、ぼくはたぶん**イエス様が磔刑された像か、マリア像があったのではないかと思っています**。長崎平戸の近くに松浦藩があり御用窯でマリア像を焼いていたのですが、そんなものが入っていたらしいのです。あと何年かすると、表千家や久田家から何かが出て来て真実が分かるかも知れません。

■花をのみ 待つらん人に 山里の 雪間の草の 春をみせばや

武野紹鴎のわび茶は、**「みわたせば 花ももみぢも なかりけり 浦のとまやの 秋の夕暮」**という藤原定家の歌を心としています。千利休のわび茶は、**「花をのみ 待つらん人に 山里の 雪間の草の 春をみせばや」**なんですね。武野紹鴎のわびは、消えていくものに対するコンパッション、消えゆくものに対する同情であり愛、憐れみなんですが、千利休のわびは雪が積もっている白の世界の下には命の芽吹きがあるのです。私のわび茶は、そういう心でおもてなしするものです。分かるかなぁ‥？

織田有楽斎という人物も不思議な人ですね、それでも戦国を生き抜いた知恵は凄いですね。